

総合学科高校における進路選択

—在生調査から—

小西 尚之 (石川県立金沢北陵高等学校)

1. 研究の目的

1994 (平成6) 年に誕生した総合学科高校は、原則履修科目の「産業社会と人間」をカリキュラムの中心とした、生徒の科目選択と進路選択を重視した学校である。しかしこれまで総合学科において、学校の進路指導と生徒の進路選択との関係は明確に意識されてきたと言えない。現場の高校教員にとって見れば「進路指導」と「進路選択」との関係はあまりにも当然のこととして自明視されてきたことである。一方、研究者の側からは、総合学科について主に生徒の科目選択と進路意識について、周りの生徒たちの影響や制度的な視点からの研究が蓄積されてきた。本研究は、学校側の進路指導の働きかけが生徒の進路希望や進路選択にどのような影響を与えているのか、を探ろうとするものである。

もちろん、生徒の進路選択に影響を与える要因は何も学校側の指導やカリキュラムだけではない。周りの生徒たちや学校外のような生活場面における影響も考慮しなくてはいけないだろう。本研究ではそのような要因も含め生徒の進路選択に与える影響を考えたい。

2. 調査の概要

本報告は、2004 (平成16) 年度から3ヵ年の予定で実施しているパネル式の質問紙調査とインタビュー調査の結果の一部をもとにしている。調査対象となったA校は、総合学科創設2年目の1995 (平成7) 年に、工業高校を母体にして誕生した。地方都市

に所在しており、生徒数は1学年約200人、全校で約600人の中規模の学校である。生徒の男女比はほぼ半々であるが、近年の特徴として女子の割合がやや多い。

質問紙調査は2004年度に入学した生徒200人全員を対象にした悉皆調査である。調査票は各教室でホームルームの時間に担任の教員に配布し回収してもらった。回答は個人の実態や意識を追跡するために記名式としている。第1回・第2回の質問紙調査の概要と第3回の予定は表1-1の通りである。第1回調査の回答者は198人であり、第2回調査は195人である。今回分析の対象とするのは、両方の調査に回答をした194人である。なお、調査対象となる生徒はA校の10期生に当たり、分析の対象である194人の男女比は男子101人(52.1%)、女子93人(47.9%)と男子の比率がやや高くなっている。

また質問紙調査と並行して、3年次になった何人かの生徒にインタビュー調査を行った。質問紙調査の結果を確認する目的もあるが、一人一人の進路選択のプロセスを具体的に探るためである。

表1-1 質問紙調査の概要

回(学年)	時期	配布票	回収票	回収率
1(1年)	2004年10月	198	198	100.0%
2(2年)	2005年11月	195	195	100.0%
3(3年)	2006年10月			

3. 進路選択の要因

2回の質問紙調査では、「進路を選ぶ際に強い影響を及ぼしたもの」は何かを聞いた。

これは進路希望で「未定」以外の何らかの進路希望を選んだ生徒に、「就職」や「四大」などの進路希望を選んだ際に影響を与えた要因として、表3-1に挙げた選択肢から複数選択できる形で聞いたものである。さらにその14個の選択肢を分析しやすいように、「客観的資料」「教師」「家族・友人」「進路学習」「校外経験」の5つの要因に再カテゴリー化した（「その他」「特にない」は除く）。

表3-1 進路選択に影響を及ぼしたもの

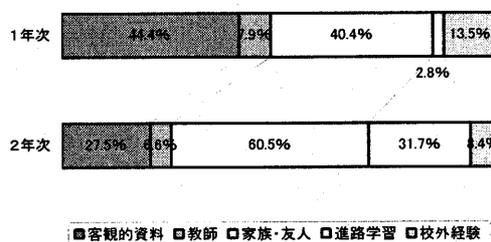
選択肢	要因
模擬試験などの学力検査の結果 職業の適性検査の結果 進路選択に関する資料	客観的資料
ホームルーム担任の先生との話し合い 進路指導課の先生との話し合い 部活動の顧問の先生との話し合い	教師
両親、兄や姉など家族との話し合い 先輩や友人との話し合い	家族・友人
「産業社会と人間」の学習 インターンシップ（2年次のみ）	進路学習
学校見学や体験入学 ボランティア地域活動などの体験	校外経験
その他 特にない	※除外

それでは1年次から2年次にかけて生徒の進路選択の要因はどのように変化しているのか。図3-1は再カテゴリー化した5つの要因を選択した人数の変化を示したものである。テストなどの客観的要因は44.4%から27.5%に大幅に減り、逆に大きく増加しているのが家族や友人との話し合い（40.4%→60.5%）や進路学習（2.8%→31.7%）である。進路学習の中でもインターンシップは2年次で初めて行う行事なので、2年次になってこの項目が増加するのは当然なのかもしれない。ここでは2年次になって家族や友人の影響で進路希望を決

めている者が6割以上いることを確認しておく。

図3-1 進路選択の要因の変化

(N=1年次 178、2年次 167)



質問紙の選択肢には科目選択の項目はなかったが、生徒の進路選択は科目選択と切り離すことはできない。というのは、多くの総合学科では、1年次の「産業社会と人間」の授業の中で2・3年次の科目選択を行う。その際、重視されるのは将来の進路希望であり、希望する就職先に必要な科目、希望する進学先に必要な受験科目などを選択するよう指導されるのである。つまり、入学して間もない1年次の時点で生徒は高校卒業後の「一応」の進路選択を求められるのだ。生徒は将来の進路に「一応」の見通しを立てることによって具体的な科目を選択することができ、また逆に、2・3年次に選択した科目が卒業時の「実際」の進路をある程度決めてしまう。この場合、科目選択と進路選択はどちらかが一方的に影響を与えるのではない。進路選択が科目選択を規定し、科目選択が進路選択を規定している。

以上の分析を踏まえ、当日の報告では、5つの要因の中でも特に影響が大きかった「進路学習」と「家族・友人」の2つの項目に加え、生徒の「科目選択」の状況にも注目しながら、生徒の進路選択の過程をインタビュー調査の結果から検討する。

※より詳細なデータと分析、参考文献などは当日配布資料を参照。